

『書記』は建て前から「斬った」ことにしたのであろうし、「伝承」はこれを踏<sup>た</sup>えて、入山の年を配慮したものであろう。

(『市民の古代』第十四集掲載)

### 『吾平山御陵考』(現代語訳)

佐野経彦 著

平野雅曠 訳

鶯<sup>う</sup>鶯<sup>が</sup>草<sup>ふ</sup>草<sup>さ</sup>不合<sup>あ</sup>の尊<sup>のみこと</sup>の陵は、明治七年の明治天皇の「御裁下」では、大隅の国肝<sup>き</sup>原<sup>げん</sup>郡<sup>ぐん</sup>始<sup>あ</sup>良<sup>ら</sup>郷<sup>か</sup>上<sup>かみ</sup>名<sup>な</sup>村<sup>むら</sup>の鶴<sup>つる</sup>戸<sup>の</sup>窟<sup>くわ</sup>とされた。

しかし、鶯鶯草草不合の尊の陵のあった場所については、さまざまな異説もあった。

ここでは、肥後の国(熊本県)山鹿郡日向村(現鹿本郡菊鹿町)説を紹介する。

天津日高彦波限建鶯鶯草草不合

の命の御陵について

豊前小倉 企救の民 佐野経彦

つしんで考えを述ぶ。

『日本書紀』は「彦波瀲武鶯鶯草草不合の尊は、西洲の宮(九州の高千穂の宮)でかくれられたので、日向の吾平山上の陵にほうむった」といつている。申すも恐多いことであるが。